第1回 〔選択肢〕の問題①

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雅也（中学一年生）は相手の気持ちを考えて話すことが苦手で、集団の中でうまくやっていけないつらさを感じている。北海道の叔父が営む養蜂場に遊びに来たが、養蜂場の近くの「北の太陽」という家で寝泊まりすることになる。そこは親に頼って生きられない子どもたちを独り立ちできるようになるまで育てる施設で、志保子（運営者）、海鳴（中学一年生）、杏奈（小学五年生）、ゆず（小学三年生）、瑛介（小学一年生）、麻央（五歳）が暮らしていて、「栄さん」が運営を手伝っている。雅也たちは、ドレスを着てピアノの発表会に出たいという杏奈とゆずの希望をかなえるために、町の名物であるイカめしのコンテストに出場し、優勝チームにだけ与えられる賞金をドレスを借りる資金にあてようとしている。次は、雅也たちが養蜂場を訪れたときの場面である。

「それできょうは？」

「ぼくたちが作ったイカめしを、味見してもらおうと思って持ってきました」

「ほうほう、作ってみたか」

これです、と杏奈が保冷バッグから、お皿を出した。

さっそくおじさんはつまようじで、輪切りにしたイカめしを口に運ぶ。

口の中でむしゃむしゃと、イカの味ともち米の甘さが溶けあうのを楽しんでいる。

うんうんうなずくと、もう一切れ、ぺろりと食べた。

まずくはないみたいで、ホッとする。

「どう……ですか？」

ぼくは、おじさんの顔を、おそるおそるのぞきこんだ。

「ん、まあ、そうだな」

おじさんが、あいまいに首をひねる。

「だめですか？」

杏奈が細い声で聞く。

「いや、おいしいのはおいしいけどね。コンテストとなると、もうひとつ、なにか物足りないな。個性というか、主張がほしいというか」

「やっぱり。いや、昨日、みんなも、そんな感想だったんだけど、けっきょくどうしていいかわからなくて」

「えっ？　それで聞きに来たのかぁ」

おどろいて、おじさんの声が裏返った。

「それがわかれば、おじさんだって優勝するさ。ああ、けど、うまいのはうまい」

本当においしいのだろう、おじさんはまた一切れつまむ。でも、①いくらうまいうまいと言われても、満足できない。

「そうだ。調味料ではちみつを使ってみるとか」

あたりを見回していた杏奈が提案した。

「それは三年前にやった」

おじさんが、［　　］をひそめた。

「どうだったの？」

「なんというか、悪くはないけど、インパクトに欠けた。できあがったイカめしにはちみつをかけたのもやったけど、逆にはちみつの味が

目立ちすぎて落とされた」
「なにそれ、むずかしい」
杏奈は言って、くちびるをかむ。
「目立たなくってもいけない。目立ちすぎてもいけない」
「やさしさみたいなものですね」
栄さんがうまくまとめた。
「まあ、このままでもいいんじゃないのかなぁ。あまり凝ったことをしても、子どもらしくないとかいって、落とされることもあるし」
おじさんが言うことも、わかる。でもやるからには、これだっていうものを出品したい。

帰りの車の中で、②杏奈は無口になってしまった。
「優勝とか、やっぱりむりなのかな」
すぐ弱気になる。
「わたしなんかが、しあわせになれるわけないもん」
「杏奈。そんなこと言うものじゃありません。聞かされる雅也君の身にも、なってごらんなさい」
栄さんがたしなめても、杏奈はなにも言い返せないほどにしおれている。
「ぼくなら、だいじょうぶです」
杏奈は、ぼくとも目を合わせようとしない。ずっと、窓の外を流れる樹木をながめる。
遠くに駒ケ岳が見える。きょうは雲が山頂をかくしている。
杏奈は本当に生きる力が弱い。はじめて会ったとき、杏奈はケンカを止めてと、階段の下から栄さんを呼んでいた。いま思えば、一年生と三年生のケンカぐらい、止めることができていいはずだ。

そしてぼくは思う。体力をつけるように、杏奈にもっと生きる力をつけてほしいと。そのためにできることを、ぼくはしたいと。
「③あきらめずに、挑戦しようよ」
言ってから、もしかしてこれは、自分自身に言いきかせているんじゃないか、という気がした。
「勝手にそんなこと、言わないで」
「勝手じゃないよ。ぼくだって、杏奈がいるから、挑戦しようって気持ちになるんだ。だから、いっしょにがんばって。もしだめだったら、そのときはいっしょに泣こうよ」
すると、杏奈はようやく「がんばる」と、手のひらですくったほどの笑顔を見せた。

午後からは、北の太陽のみんなで、海へ向かった。
麻央を、お母さんと会わせるためだ。
港の近くにある公園の駐車場に、車をとめた。
おなかの大きな女の人が、閉じた日傘を手に、陰になった*東屋のベンチにすわっていた。
志保子さんは、麻央の小さな手を引いている。
栄さんはぼくたちに、「わたしたちは、あそこで待っていましょう」と、自動販売機がある広場を指さした。
「麻央ちゃん、しっかりね」
しっかりの意味は、ぼくにはわからないけど、杏奈とゆずが、麻央の手を、ギュッとにぎった。
麻央は突っ立ったまま、注射をされる前みたいに体をかたくする。
自分の母親と会うのに、どうして五歳の子がこれほど緊張しなくてはいけないのか。ぼくには理解できなかった。

「じゃあ、行ってきます」
志保子さんまで、いつもと声がちがう。
④麻央は志保子さんの手をふりほどくと、最後にギュッと、海鳴にだきついた。
だかれるのはいやでも、だきつくのはだいじょうぶみたいだ。
北の太陽に来た日、二階の窓から見た、小さな女の子。海鳴とボールを投げあって遊んでいた麻央は、とても楽しそうだった。家族の姿をしていた。
「さあ、行きましょう」と、志保子さんにうながされ、麻央が歩く。
北の太陽を出る前、志保子さんが何度もくしでとかした髪に、黄色いリボンがゆれている。
麻央が持っている中で、いちばんいいリボンなのだろう。
志保子さんは、麻央にさよならを言う決心をポケットにしのばせているのだろう。
東屋の中で、志保子さんはお母さんと言葉を交わした。
*昨日の話だと、麻央を引き取る可能性もあるという。
新しいだんなさまができて、お母さんの暮らしもゆとりができたように言っていたけど、男の人の姿は見えない。どこまで真剣に、麻央のしあわせを願っているのだろうか。
そして子どもには、なにもできない。
*やっぱり、ただ会いに来ただけなのか。自分のざわつく気持ちをなだめるためだけに、*捨てたわが子を利用しているだけなのか。
志保子さんが二人からはなれてもどってきても、お母さんは麻央をひざにだくわけでもなく、となりにすわらせたまま、話をしているようにも見えなかった。
強い風と波が、ぼくの耳の奥でいやな音をたてる。

「前にも会いに来たの？」
海鳴に聞いた。
「うん。北の太陽に来たこともある。自分がしんどくなると、来る。いつもああなのさ。ただぼうっとするだけ。そうしないと、自分が生きてることを肯定できないんだって。意味わかる？」
「わかんない」
「ぼくにも」
「だれが……」
言ったの？　と聞こうとしてやめた。そんなこと言いそうな人は、一人しかいない。となりで静かにたたずんでいる志保子さんだ。
そしてぼくたちの会話も聞こえていたのだろう。
「あの女の人は、子育てが、苦手なのよ。子どもをうまく愛せない。でも、本当に子どもがいやな人なら、会いにも来ない」
まるで、お母さんの背中を支えるように志保子さんは言うけど、
⑤ぼくはなっとくできない。
「じゃあ、どうしてうまく愛せないのに、また、子どもを生むのですか」
「今度は、うまくいくかもしれないって、思っているのでしょう。その気持ちはたいせつにしてあげなくてはいけません。麻央ちゃんのお父さんは、すぐどこかへ、いなくなってしまった。でも今度の――」
「今度とか、おかしいでしょ。ぼくたちは一度きりの存在なのに。プラスチックのカプセルに入った景品じゃないんだよ。それに、本当に麻央ちゃんもいっしょにって、新しい生活を考えるのなら、ちゃんと男の人もここへ来るべきでしょ」
⑥ぼくの中でわき起こる怒りは、おさえようがなかった。
「ぼくが言ってやります」

ぼくの体はもう、東屋に向かって動き出していた。
背後で足音がして、⑦強い力がぼくの腕をつかんだ。
「雅也。待って」
海鳴だった。一歩も前にふみ出せなかった。
こんなに力が強かったんだ。
「はなせよ、海鳴」
「だめだよ。そんなことをしたら、麻央ちゃんが悲しむ」
麻央は、お母さんのとなりで、いまもじっとしていた。
「雅也が思うくらいだもの、みんなわかってるよ。でもいまそんなことしても、麻央ちゃんを混乱させるだけだよ。それなら見守るだけのほうが、まだいい」
そして志保子さんの声がした。
「雅也君、わたしたちは、できる範囲の中でしか生きられない。どうすれば麻央ちゃんがしあわせになれるのか、正直わたしにもわからない」
「じゃあ、なんのために、みんなでここに来たんですか。志保子さんが麻央ちゃんを一人で連れてくればいいだけのことじゃないですか」
「見ておくためよ。経験を、ひとつでも重ねるため。そして経験を共有するため。いつかみんなの力になると思うから。それは雅也君も、否定しないでしょ」
「それは……」
そうだった。海鳴だけじゃない。杏奈も瑛介もゆずも、みんなそばにいて、ぼくと同じ光景を見ている。
みんなと出会えて、ぼくの心の中の引き出しも、宝物がたくさん増えた。それはいつか、ぼくの力になると、そう確信している。
「雅也君、空を見てごらんなさい」

140　145　150　155　160

志保子さんに言われて、視線を上げた。
波の上に青い空が広がる。
耳に志保子さんの声が届く。
「空は――空は、どれだけ多くの残酷をながめてきても、おだやかだ。空を見ていると、けっきょくわたしにできることなんて、なにもないとわかる。だからこそ、わたしも見ていよう。せめて残酷から、目をそらす人にはならないように」
志保子さんが、暗唱して聞かせるように言う。
「*そんな場面、みつばちマーヤの冒険の中にありましたか？」
「ないわよ。これはいつもわたしが大事にしている言葉。ですぎた真似をしないように。だからといって、なにもかもいやになって逃げ出さないように。七十二年生きてきて、たどり着いた言葉。雅也君もいつか、自分の言葉を持ちなさい」
ぼくの言葉って……なんだろう。
そうしているうちに、ぼくの中の衝動はおさまっていた。
海鳴も、杏奈も、瑛介も、ゆずも、みんなじっと待っている。
あいかわらず、麻央がお母さんと言葉を交わしてる様子はない。
砂浜に置いていかれた麦わら帽子みたいで、二人の姿が、夏の忘れ物のように見えた。
濃い茶色のベンチ。
色あせた小児科病院の看板。
側面がさびかけた、百円ジュースの自動販売機。
無限にわく潮のにおい。
時間だけがゆっくりと過ぎて、⑧いままでの自分の価値観が上書きされていくのを、十三歳のぼくは、たしかに感じていた。

（村上しいこ「みつばちと少年」〈講談社〉より）

165　170　175　180　185

＊　東屋…休憩所。
＊　昨日の話…昨日、「麻央の母親が麻央に会いたがっており、麻央を引き取ると言うかもしれない」という連絡を志保子が受けた。どこまで内容を理解できているかはわからないが、この連絡があったことは麻央には伝わっている。
＊　やっぱり、ただ会いに来ただけなのか…昨日、杏奈が「自分が会いたくなったときだけ会いに来るなんてひどい親だ」ということを言って麻央の母親を非難した。
＊　捨てたわが子…麻央は、「母親が育てられない」という理由で北の太陽に来た。
＊　「そんな場面、みつばちマーヤの冒険の中にありましたか？」…雅也と志保子は『みつばちマーヤの冒険』を愛読していて、この本について話をしたことがある。

問一　――線①「いくらうまいうまいと言われても、満足できない」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　自分たちが考案したイカめしに自信があったのに、コンテストで優勝する可能性が極めて低いことが分かったから。
イ　自分たちが作ったイカめしの出来映えがいまひとつで、あまりおいしくないということが分かったから。
ウ　自分たちが作ったイカめしが物足りないことに変わりなく、それを改良するための方法も教えてはもらえなかったから。
エ　自分たちが考案したイカめしの評価についておじさんがはっきりした意見を言わなかったから。

問二　□に体の一部分を表す二字のひらがなを入れ、「□をひそめる」という「不快な様子」を表す慣用表現を完成させなさい。

問三　――線②「杏奈は無口になってしまった」とありますが、このときの杏奈の気持ちの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　イカめしコンテストでの優勝が絶望的になったことで人生の不条理さを感じて腹を立てている。
イ　自分が提案したイカめしをおじさんに冷たく否定されたことにショックを受けている。
ウ　イカめしコンテストについても自分のこの先の人生についても悲観的に考えて気落ちしている。
エ　自分が提案したイカめしに関して栄さんに優しさに欠けると皮肉を言われたので落胆している。

問四　――線③「あきらめずに、挑戦しようよ」とありますが、このように言った雅也の気持ちの説明として適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。
ア　困難に直面するとすぐにくじけそうになる杏奈に今より強くなってほしいと願い、そのために協力したいという気持ち。
イ　栄さんにあっけなく言い負かされて元気がなくなってしまった杏奈を別の話題で何とかはげましたいという気持ち。
ウ　自分の弱気な発言によって雅也を暗い気分にさせてしまったことを気に病んでいる様子の杏奈を元気づけたいという気持ち。
エ　イカめしコンテストで優勝することについて弱気になっている自分自身を奮い立たせたいという気持ち。
オ　他者とうまくやっていくことが苦手で生きる力が弱いと思っている自分自身を鼓舞したいという気持ち。

問五　――線④「麻央は志保子さんの手をふりほどくと、最後にギュッと、海鳴にだきついた」とありますが、麻央が海鳴にだきついたのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問六　――線⑤「ぼくはなっとくできない」とありますが、雅也はどういうことに納得できないのですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　麻央の母親が子どもをうまく愛せないのにまた子どもを生み、麻央を育てることを放棄しているのに彼女に会いに来ること。

イ　捨てたにもかかわらず気まぐれに会いに来る麻央の母親を、志保子さんが弁護し、自分たちを非難するようなことを言うこと。

ウ　麻央の母親が、母親を恋しく思う子どもの気持ちを理解せず、会いに来ても話もせずに自分のペースで麻央と接していること。

エ　新しく麻央の父親になる人を連れてこなかったばかりか、自分が満足するために麻央を呼び出して利用していること。

問七　――線⑥「ぼくの中でわき起こる怒りは、おさえようがなかった」とありますが、このときの「ぼく」の「怒り」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　何回も子育てに失敗したにもかかわらず今度こそうまくいくと言って失敗を挽回するチャンスを要求する麻央の母親は、麻央をおもちゃのように弄んでいると思っている。

イ　うまくいく可能性があるという程度で麻央を引き取るのは、一回限りの彼女の人生を軽く見ており、一緒に暮らす人が彼女に会いに来ないのも本気で幸せを願ってないからだと思っている。

ウ　幼い麻央をひどい目に遭わせ、長い間、家族とはなればなれの生活を強いたくせに、自分の母親としての誇りを保つためだけに麻央を引き取りに来たのは許せない。

エ　本当に麻央のこれからの幸せを願っているのなら、新しく父親になる人も、麻央に会ってこれまでの自分の行いについて謝罪すべきなのに、この場に来ることさえしない態度は認めがたい。

問八　――線⑦「強い力がぼくの腕をつかんだ」とありますが、海鳴が「ぼく」を止めたのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問九　――線⑧「いままでの自分の価値観が上書きされていくのを、十三歳のぼくは、たしかに感じていた」とありますが、雅也はどのように考えるようになったのだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分はつらい状況にある人の気持ちを思いやって行動できていなかった。独りよがりで打算的な行動は人の心を傷つけることになってしまうことを肝に銘じておかなければならない。

イ　つらい状況にある人に対してできることが限られていることもある。しかし、そこから目を背けて逃げるのではなく、それに黙って向き合って自分の経験とすることが生きる力になるはずだ。

ウ　つらい状況にある人に余計な口出しをすることはいかなる場合でも避けるべきであり、自分ができる範囲のことを地道にやっていくことがこれから先の生きる力になっていくはずだ。

エ　自分を温かく受け入れてくれた「北の太陽」の人たちとのふれあいによって自分は精神的に成長できたので、これからも関わり続けていって心の中の大切な思いを増やしていきたい。